

1. 活動のテーマ

<テーマ>

動き 0歳児から5歳児
～環境構成による操作活動の展開と、手指の巧緻性から全身の協応運動への発達の
連続性の構築～

<テーマの設定理由>

子どもたちは日頃から、玩具を手にとって動かしたり、並べたり、つなげたりする中で、身体を使って試すことを楽しんでいる。特に床いっぱいに広がる環境では、座る・しゃがむ・歩く・運ぶなど、全身を使った動きが自然に生まれている。玩具を操作する中で、子どもたちがどのような身体の動きを生み出し、どのように遊びを発展させていくのかに着目した。自由に配置できるブロックを用いることで、動きの変化や友だちとの関わりの広がりを捉えたいと考え、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

1. 玩具に触れる

自由遊びなどの時間を通して、各クラス玩具の扱い方に慣れる

2. 異年齢交流（合同保育）で遊ぶ 主に6月から12月

異年齢との交流を通して、玩具の遊び方に膨らみをもたせ、低年齢の子どもは幼児クラスの指先の巧緻性を模倣し、「つまむ」「つなげる」「引っ張る」などの体の細やかな動きに対して遊びを通して感覚を育む。

3. クラス会議を通して遊び方を高次的内容へ繋げる

「投げる」「走る」などの、指先の巧緻性、座る、立つ、這うなどの基本動作からより発展した遊びへと繋げる。（別紙報告書参照）

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

環境・素材の設定

カラフルな連結できるブロックを十分な数用意し、保育室の床一面に広げた。子どもが自由に移動しながら手に取れるよう、机や椅子は置かず、のびのびと活動できる空間を設定した。

床に散らばったブロックを見つけると、子どもたちは歩いて拾い集めたり、しゃがみ込んで両手で持ったりしながら遊び始めた。

一つひとつをつなげて長く伸ばす子、円や四角など形を意識して並べる子、友だちと同じ形を作ろうと近くに集まる姿が見られた。

つなげる長さが増すにつれて、ブロックを引きずるように動かしたり、囲いの中に入ったりと、身体全体を使った動きへと発展していった。保育者は「長くなったね」「どんな形かな？」と声をかけ、子どもたちが自分の動きや形に気づけるよう関わった。

完成後は、できあがった形を囲んで「へびみたい」「おうちだよ」「まるだね」などと話し合い、自分たちの動きや工夫を言葉で伝える姿が見られた。友だちの形に興味を持ち、まねしようと再び動き出す子もおり、遊びが自然に循環していった。



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

玩具を操作する中で、子どもたちは自然に立つ・座る・移動するといった多様な動きを生み出していた。形を作る過程そのものが身体表現となり、友だちとの関わりや言葉のやりとりにもつながっていた。

環境を広く確保し、自由に選べる素材を用意することで、子ども一人ひとりの動きの発見や探究が深まることを改めて感じた。